

第三回派遣 10月27日～10月28日

『宮城レポート』

石神井公園店 伊藤 朋生



私が、東北地方太平洋沖地震の被災地の一部、宮城にボランティアとして出向かせていただくことが決まったのは、九月末のシフト会議の時でした。日程は二日間で、初日は被災地見学。作業を行うのは二日目とのことでした。当初は軽い気持ちで立候補していませんでした。確かに今回の震災の被害は尋常ではない、それは震災発生時から今現在までテレビやラジオで放送された膨大かつ様々な情報と、三百キロ以上離れた東

京でもあれほどの揺れを体感したという事実から身をもつて理解しているつもりです。しかし、そうはいってもボランティアに向かう十月末には震災からすでに七カ月以上の月日が経っていることになりました。いくらなんでもある程度形になり始めているだろうし、そんなに作業するようなこともないだろうと考えていたからです。加えて、

最初は汚れていても構わないような服装と、軍手、ゴム長靴を持参していく予定でしたが、それも変更になり、ハサミや櫛、ブラシ等の普段の業務で必要とする道具を持参し、無料のカットをするというボランティアの内容になったことで、ますます『やはり震災の被害を受けた場所でのがれき撤去等の作業は、人手が必要なくなってきたいるのだろう』などという迂闊な考えが私を支配していきました。

そして出発当日。午前三時のまだ真つ暗な時間に本店に集合しました。メンバーは社長、本店店長の濱田さん、そして私の三名です。社長が運転を務めてくださり、店長が助手席、私が後ろのシートに配置して、車は走り出します。車内では、社長が話す仕事の話に耳を傾けたり、時に談笑したりして過ごしました。たびたび休憩のために止まるサービスエリアでは、必ず置いてある大きな看板型の地図に目を通して徐々に

現地に近づいていることを実感すると、秋田県出身の私は、帰省するときに似たドキドキわくわくとしたような気持が、残酷にも芽生えていました。この後、人生観を変えるほどの悲惨な光景を目の当たりにすることも知らずに。

そうして5、6時間が過ぎたころでしょうか、宮城県に入り山と海に挟まれたような濘地を走っていると、山々の紅葉しているのが見えてきました。やはり東北の紅葉は今くらいの時期なんだな、と、のんきなことを考えていましたが、何か様子がおかしいのです。紅葉している木々としていない木々があまりに不自然に分かれていたからです。そして不思議そうに外を眺めている私に気がついたのか、社長が説明してくださいました。あれは紅葉ではないと。初めは理解できずに茫然としていましたが、まさかと思いきや聞いてみると、赤く変色している木々は津波がかぶったのが原因だとのこと。半分冗談だと思っていました。なぜなら、その変色している個所の範囲がおかしい。高さでいったら優に20メートルは色が変わっています。こんなに巨大な津波がきたら、海沿いの街はどうなってしまうのか……。私の脳裏に、ふとニュースで見た震災直後の被災地の風景がよぎりました。気がつくとい私は全身に鳥肌をまと

(14) 第三回派遣 10月27日～10月28日



い、言葉を失っていました。しかしこんなものはほんの序章に過ぎないことを、後ほど思い知らされることになりました。それからまた少し車を走らせ、はじめは南三陸町に向かいました。震度6弱の地震が襲い、死者、行方不明者数合わせて100名以上の被害を受けた場所です。気の小さい私はすでに帰りたい気持ちの火がくすぶり始めていました。これから直面する現実には自分が耐えられるか不安でした。

そして南三陸町に到着、山道から抜け視界が開けた時にその光景は現れました。

：何もない。正確には何か建造物が建っていたであろう痕跡があるだけ。もともとあったものは、何一つまともに残されてはいませんでした。少し空いているスペースに車を止め、写真をとるために外に出ました。閑散とした景色は十月の東北の風を、より一層冷たく感じさせました。不意に左

に目を向けると少し高めの丘に車が止まっているのが見えました。しかしよく見るとそれは駐車しているのではなく、ただ木と木の間に無様に引っ掛かっているだけでした。恐らく波に流され、彷徨った挙句あそこにとどり着いたのでしょう。誰に聞いたわけでもありませんが、そう推測できてしまうようになっていた私がいきました。僅かではありますが、この現実には早々にも順応してしまっているようで、少し自分が嫌になりました。社長の話によると、これでもきれいになったのだといえます。以前はがれきやら何やらで車両の通行もままならなかったと。盲点でした。確かに震災後すぐにこんな状態になるはずありません。がれきの撤去作業、中途半端に残ってしまつて倒壊の危険性のある建造物の解体作業。そして行方不明者の捜索等、数々の苦労、心労を積み重ねてようやくここまでたどり着いたのです。マイナスの地点から、ゼロの地点、つまりスタート地点に。私の中で、一瞬だけ希望の光がちらついた気がしました。



しばらく散策した後、また車で移動しました。次は気仙沼に向かいます。そこで見た光景が今回の宮城訪問で自分の人生観を変えてしまった一番の要因だったと思います。どの辺からだったかは、はっきりとは覚えていません。いつのまにか、あたりは南三陸町のそれとは明らかに違う光景になっていました。大きく破損した工場、そこらじゅうに倒れている電柱、漂う腐敗臭、応急的によせられたがれきや廃車。それが見渡す限りに広がっていました。未だ残っている恐怖と絶望の片鱗が私の足を竦ませました。先に道路の修復をしたらしく、車はなんとか通れるようになっていました。それでもしつかりとしたアスファルトの道路ではなく、砂や砂利で作られたでこぼこ道ですが。そこでもちよつとした場所に駐車し、外へ出て、写真をとるために少し歩きました。僅かに震える足に何とか言うことを聞かせながら。突然襲ってきた、体験したことのない津波に、突如として無情に

引き裂かれ、もぎ取られ、奪われていった命の叫びが聞こえて来るようでした。病院や警察署も大きな被害を受けていました。病院は四階建てで、屋上に避難できた人だけが助かったと聞きました。もうじき退院できることを楽しみにしている方もいたかもしれません。もしかしたら、重い病で静かに死を待っていた方もいたかもしれません。お見舞いに来た方々やあるいは手術中の方も。そこに悪魔のごとく津波は押し寄せ、複数の命を呑みこんで去って行きました。なんの罪もない、しかも身動きの取れないような人たちの命を、です。もしも自分が、もしくは自分の家族が同じ目に会ったことを想像していただきたいと思



います。まともな精神状態でいられないことは確かでしょう。私は、この世に神なんでもものは存在しないということを痛感させられました。

そして警察署、むき出しになった建物の内部には留置所と思われる鉄格子が顔をのぞかせていました。もし当日そこに留置されていた人がいたとしたら…。大変な恐怖だったと思います。確かにそこに入れられるのは、なんらかの道徳に反した行動をした人たちです。だからと言って無条件に命を奪われていいわけがないのです。

そしてその日最後に立ち寄ったのが、小学校です。そこは火災と津波の被害を大き

く受けていました。三月ですから、東北はまだまだ寒い時期です。各クラスでストーブを使用していたのでしょうか。火災の原因はそれだと思われます。加えて十数メートルの津波の衝突。校内に入ることができませんでしたが、ぎりぎりまで近寄ることができ、窓から中をうかがい知ることができました。散乱した書類、ランドセル、片方だけの靴、サッカーボールなど、一階は津波が来ていますから、焼けずに残っているものもありました。地震の直前までは元気に校内を走り回っていた子供たちの多くが、命を奪われたそうです。助かった子もいたでしょう。しかし心にはそう簡単に消

(16) 第三回派遣 10月27日～10月28日

せないような深い傷が残ったに違いありません。そこでは写真をとることができず、ただ目を閉じ、手を合わせていました。そのときこう思いました。戦いは全然終わっていない、まだ始まってもしないのではなにかと、『七か月も経った』のではなく、『七か月しか経っていない』のです。まだ被災地は大きな悲しみに包まれています。確かにテレビでは笑顔でふるまう被災者の姿が放送されることも多々あります。その映像を見たバラエティー番組のコメンテーターが『こつちが元気をもらおう』云々の発言をすることもあります。そんな人たちに言いたい。それが心からの笑顔だと思えますか？先にも記述しましたが、まともな精神状態でいられるわけがない、彼らはみんな恐怖や悲しみに麻痺し、慣れてしまっているのです。そんな方々に元気をもらおう？そんな受け身でいいんですか？悲しみと恐怖を塗りたくられ、かけがえの無いものを数え切れないほど失い、涙さえ枯渇してしまつたような人たちから、まだ何か搾り取る気ですか？そんな無責任な発言、すぐに撤回していただきたい。まだまだ我々は彼らに寄り添っていかなければならないのです。与え続けなければならぬのです。

初日の見学が終わり次の日の午前十時、近くの公民館にて、カットのボランティア



を行いました。総勢十名ほどでしょう。近く所で、今日の連絡を受けた、わりと高齢者の方々が集まってくれました。初めは、笑顔いっぱい接客し、短い時間ですが、その中でもいろんな話をしたいと思ひ臨んでいました。しかし、一番最初に接客した方が八十歳くらいで、こんな高齢の方も等しくあの恐怖を体験したのかと思うと悲しみが溢れ、喋ると泣いてしまひそうになつてしまひ、結果、誰ともまともに会話することができませんでした。理容師として失格です。それでも今の自分が与えられる精

一杯を出し切ることができたと思います。それから昼食をとり、急ぎよ入った神社での清掃の作業依頼をこなしてから、帰路につきました。帰りの車中、当然ですが行きとは全然違う心境でした。初日の前半の、これ以上現実を見たくない、帰りたいたいという感情は消え、震災に対する怒りに似た気持ちに変わっていました。そして震災の被害にあわれた人たちに、自分なりできることを惜しみなくやり、悲しみや痛みを共有し、寄り添っていこうと誓いました。被災者の方々が心から笑顔になれるその日まで。

